哲学カフェ@名古屋
　2014 年 4 月 26 日 11:00～13:00
　テーマ：「フィロソフィーとは何か？」　（メタ哲学カフェ　第一回）
　場所：カフェ・ぶーれ
　進行：三浦隆宏さん
　レビュー：安田清一郎

この哲学カフェは、「哲学カフェということそのものについて改めて考えてみたい」という趣旨で始まったシリーズの第一回目でした。登場した論点・意見をだいたいの時系列を追って報告します。[1]

1. 哲学において、異なる意見間で（成否の）議論の余地があるか。
    a. ない。哲学の問いに「正しい答」はない。いろんな考え方があってよい。
    b. ある。相手の意見の理路を理解したうえでその瑕疵を指摘するなど。こうした議論を通じて考え方が洗練される。
2. 哲学の説明はわかりやすくあるべきか。
    a. べき。
        i. 難しいことでもわかりやすく説明できるのが、頭のよさでは。
        ii. （難解な語彙ばかりの抽象論ではなく）わかりやすい具体例・実体験に落とし込んで説明すべき。
    b. 限らない。
        i. 難しいことを自力で咀嚼しようと試みる経験そのものが、大事な知的トレーニングになっている。
        ii. わからにくいものをわかりにくいまま受け取る知的忍耐の大切さ。
3. 専門家の説明（文章）はわかりにくい。
    a. 鷲田清一氏のわかりにくさに対し梅原猛氏のわかりやすさ。鷲田氏はほぼ西洋哲学という専門の中で修行を積んでいるのに対し、梅原氏はより広い分野に経験がある。「伝える」という局面ではこれは強み。
    b. 芸術の世界や職人の世界にも、（すべて「専門」の世界において）「わかるひとにしかわからない」ことがらがある。
    c. 「わかる/わからない」ということにはいろんな要素がある。よって、「わかりやすさ」のべき論では、例えば「専門家にしかわからない」というときのわからなさと、理路の複雑さによるわからなさなどは、区別すべき。
4. 「わからない」の大切さ。
    a. 「わからない」に遭遇したとき「わかりたい」と感じるのは人の本能である。（だから「わからない」には大切な価値がある。）
    b. 「わからない」にも 2 種類ある。対象を拒絶する「わからない」とそれに惹きつけられている「わからない」。（大切なのは後者。）

---

[1] このレビューは、対話の録音を何度か聞きなおしてまとめたものです。が、かといって「客観性」を保証するものではまったくありません。実際はもっといろんな話が出て対話も込み入っていましたが、レビュワーの個人的解釈に基づいて編集カットを入れ、再構成し、ことばを補ったものです。

    c. 後者は「わからないけどわかりそう」の場合。
5. 哲学は万学の祖か？
    a. Yes.　国や企業、個人などが行動方針などを意思決定する際には、その根底で理念や価値観などの根本原則を前提する。これらついての学問が哲学。法学や工学や医学など、そうした意思決定に際して目的達成のための手段の創出・選択に資する学問ではなく、その目的設定のほうに資する学問。
    b. No.　それはちがうのでは。その考え方だと、(「学ぶ対象」の質は違えど）哲学も（法学等の諸学同様）「学ぶ」もの、ということになる。が、本当の哲学は「学ぶ」ものではなく、本人が「行う」もの＝行為ではないか？
        i. 特に、「わかっていなかった」ことすら気づいてなかったような（原理的な）ことについて、改めて「わかっていなかった」と気づき、改めて「どういうことだろう」と自問してその答を求める行為、が哲学ではないか。つまり「無知の知」。
6. 「こども」とは？（そして「おとな」とは？）[2]
    a. 「こども」とは知識等がまだまだ未成熟な存在のこと。⇔「おとな」とはそれが成熟した存在。
        i. 知識の成熟にともなって「おとな」が身につける先入観などから「こども」は自由。だからこそ「おとな」にはできないような（原理的な）質問ができる。できてしまう。
    b. 「こども」とは社会常識がまだまだ未成熟な存在。⇔「おとな」とはそれが成熟した存在。
        i. 社会常識の成熟にともなって「おとな」が身につける（あるいは縛られることとなる）さまざまな社会的規範などからも「こども」は自由。だからこそ、「おとな」には（ある種の良心の呵責なしには）できないような無責任な言動ができる。できてしまう。(良心の呵責なしに。)
7. 「哲学者」とはすなわち、「こども」なのではないか？（＝「哲学的成熟」という概念は自己矛盾していて成立しえないのではないか？）[3]
8. 「哲学者」は「おとな」でもある。(＝「哲学的成熟」もありうる。)
    a. 「こども」とは「おとな」にはできない哲学的な（原理的な）問いかけが出来る存在かもしれないが、同時に、たとえば「問う」という行為によって「おとな」なら請け負うことになるような責任を請け負う「能力」もまた未成熟な存在である。問うても問いっぱなしで放ったらかすような「こども」に哲学は無理、ということ。[4]
9. 結論：「哲学」という行為は、「こども」の良い面（6.a.i.）と「おとな」の良い面（6.b.i.）の両方を要請する行為である。

---

[2] 「フィロソフィーとは何か」というテーマでこの話題は明らかに脱線です。が、結果的にこの「脱線」のおかげでこの日の対話には意外な深みが生まれました。
[3] レビュワー解釈：この質問者は「哲学」を上記 5.b.i.で理解し、「こども」を 6.a.i.で理解している。
[4] レビュワー解釈：この反駁は「こども」の負の側面 6.b.i. に言及することで、「哲学行為」（というより、すべての「理性的思考」）の見落とされがちな、しかし重要な「おとな」的（＝規範的）な側面に光を当てている。